

事業の実施内容

第十七回酒都で聴く居囃子の会

融

令和4年10月10日（月・祝）

会場 白鷹緑水苑 宮水ホール

午後14：30開演（開場・受付開始14：00）

古くから芸能と縁の深い酒都・西宮の造り酒屋において、地元在住の能楽師による謡と囃子で、能特有の音楽性と言葉の美しさを楽しむ「居囃子の会」。今回は満月の宵にちなみ、名月の輝く廃墟を舞台に、過去への追想、懐旧の情を優美に描く「融」を取り上げ、月にちなんだ演目とともに楽しみいただきました。

前半、まずは月にまつわる能の演目を二曲、十五夜の月光のもと、琵琶湖に三井寺の鐘が響き渡る情景が謡われる、三井寺の『鐘之段』を謡と小鼓の一調で、そして「松風」から、汐汲みの海女が、汐にちなむ各地の浦の名をあげつつ汐を汲み、桶に映る月影に興じる場面を連吟でお聴きいただきました。続く狂言は、酒にまつわる主従のやり取りがほのぼのとした笑いを誘う「寝音曲」を取り上げました。

さて、源融は、その出自や経歴から『源氏物語』の光源氏のモデルといわれ、源氏が贅を尽くして造営し、栄華の極みを謳歌する舞台となった「六条院」も融の河原の院を模したものとされています。前半最後は、源氏物語『胡蝶』から、源氏の六条院の豪壮な有様を、京言葉の語りでお聴きいただき、融の栄華とその邸宅のありし日の姿を偲んでいただきました。

休憩を挟んでの後編は、いよいよ番囃子「融」です。

舞台となる六条河原院跡は、昔左大臣源融が風雅贅沢をした屋敷跡です。源融は、嵯峨天皇の皇子として生まれ、後に臣籍に下った人物ですが、884年、陽成天皇が17歳で退位すると、その血統の正しさから次の皇位を望みます。しかし時の権力者、藤原基経に阻まれてこれはかないませんでした。その失意からか六条河原に大邸宅を造営し、桁外れの風流生活に耽溺して余生を過ごします。陸奥の景勝地、千賀の塩竈の風景を自宅の庭に模し、毎日難波津から塩水を運ばせて塩を焼いたというエピソードが曲中でも語られます。

融の栄華を象徴する河原の院は、彼の死後荒れ果て、かつての面影を失いますが、それを

見て、融存命中の遊興の日々に思いを馳せた紀貫之の和歌は、前場、汐汲みの老人が融にまつわる故事を物語る場面でも引用されています。前場では、シテの汐汲みの老人が最初に登場した時には月はまだ低く薄暗く、その昔語りの内に時間が経過し、気が付くと高く昇ってあたり一面明るくなっていたという情景が流麗な詞で描かれます。

後場では、シテがありし日の融大臣として現れ、昔を偲び月下で舞いますが、今回「舞返し」という、舞に関する小書きがつきます。通常の舞は、高音の音色に合わせ、やや早めのスピードで舞う「早舞」です。これに「舞返し」の小書がつくと、シテが早舞の途中で橋掛かりに行き、囃子を聞きすますように佇む「クツロギ」という演技が入り、その後に最もテンポの早い〔急之舞〕を舞う、という囃子の聴きどころです。

間近で聴く囃子には、融大臣が月に興じ、優雅に舞い遊ぶ姿を彷彿とさせる、圧倒的な臨場感がありました。

僅か三間四方の簡素な舞台空間に様々な情景を描き出す能には観客の創造力が不可欠のように思います。ましてや、視覚的要素が無いのが居囃子という上演形式です。本日は囃子と謡の力がいかに私たちの創造力をかきたて、演者と観客が一体となってここに、名月の輝く廃墟の情景とそこで優雅に舞興じる融の姿を現出させるのか、実感していただけたのではないかと思います。





入場者数 88 名

プログラム

一調 「鐘之段」『三井寺』より

謡 寺澤幸祐

小鼓 久田陽春子

連吟 『松風』より

シテ・地謡 梅若基徳

地謡 梅若雄一郎

狂言 「寝音曲」

シテ（太郎冠者） 善竹隆司

アド（主） 善竹隆平

そうぢや

女房語り 「六条院の舟楽」 『京ことば源氏物語 胡蝶より』 山下智子

休憩

番噺子「融」

シテ（汐汲みの老人・源融の霊）	上田拓司
ワキ（旅の僧）	上田宜照
地謡（地頭）	梅若基徳
地謡（副地頭）	寺澤幸祐
地謡	上田顕崇
地謡	梅若雄一郎
地謡	寺澤拓海

笛	貞光智宣
小鼓	久田舜一郎
大鼓	大村滋二
太鼓	中田弘美

本編 5時10分 終了

主催：「西宮発・今、伝統芸能」実行委員会 共催：白鷹緑水苑
後援：西宮市・西宮観光協会・公益財団法人 兵庫県芸術文化協会